小中高連携した英語教育の取組とその展望

― 山形県「小中高大連携プログラム」をもとに ―

青　柳　敦　子[1)]

現在，小・中・高等学校を連携させた英語教育の抜本的充実が課題となっている。これまでも，小・中学校の接続や中学・高校の接続において英語教育のギャップは問題となっていた。本稿の目的は二つある。第一に，山形県レベルでの小・中・高等学校の英語教育の現状と課題を明らかにすること。第二に，平成 27 年度より着手した，鶴岡市をモデル地区とした山形県「小中高大連携プログラム」における英語教育実践の特徴と課題を明らかにすることである。

キーワード：英語教育，小中連携，中高連携，郷土学習，山形県「小中高大連携プログラム」

はじめに

山形県教育委員会では，第６次山形県教育振興計画と連動し，英語教育の一層の強化・改善を図るため，平成 27 年度から山形県「英語教育改善プラン」を実施している。中でも，鶴岡市をモデル地区とした山形県「小中高大連携プログラム」では，小中高 10 年間の系統立てた指導と郷土学習とのつながり，児童生徒間交流を中心に展開している。本稿では，山形県の英語教育の現状と課題の考察を踏まえ，このプログラムのねらいと今後の展望について考察する。

１　国が示す英語教育改善の方向性

平成 25 年 12 月に文部科学省がまとめた「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では，小学校中学年（３・４年生）に活動型を導入し，コミュニケーション能力の素地を養うため，週１～２コマ程度を実施，小学校高学年（５・６年生）では，教科型とし，初歩的な英語の運用能力を養い，コミュニケーション能力の基礎を養うのに必要な一定時間をモジュール学習[2)]も活用しながら行うことが示されている。

また，中学校においては，小学校での学びの連続性を図りつつ，身近な話題についての理解や表現，簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力の育成を図ること，中学校においても授業を英語で行うことを基本とすることとなどが，「今後の英語教育の改善・充実方策について～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～（報告）」（文部科学省，2014）に盛り込まれている。

あわせて，中・高等学校では，CAN-DO 形式[3)]での学習到達目標設定，扱う言語活動の高度化（発表，討論，交渉等）に対応した指導，パフォーマンステストを活用した４技能の総合的な評価方法について記されている。

全体を通して，「何を学んだか」から「英語を使って何ができるようになったか」への転換の必要性が強く打ち出されている。

さらに，文部科学省（2015a）は，「求められる英語力」の具体的な指標として，2020 年までに，生徒の英語力については，中学校卒業段階で英検３級程度以上 60％（平成 26 年調査（文部科学省，2014）では 35%），高等学校卒業段階は英検準２級～２級程度以上 60％（H26 32%），英語担当教員については，英検準１級程度以上の力を保有する割合を中学校 50％（H26 27.7%），高校 75％（H26 52.3%）へ引き上げたいとしている。

２　本県における英語教育改善の取組

山形県教育委員会(2015a)は，平成 27 年５月に「第６次山形県教育振興計画」（以下６教振）を策定し，今後 10 年間の本県教育の目標を提示したところである。「人間力にあふれ，山形の未来をひらく人づくり」を基本目標とし，「『いのち』をつなぐ人」「学び続ける人」「地域とつながる人」の三つを目指す人間像として掲げている。

６教振の中の基本方針Ⅳ「変化に対応し，社会で自立できる力を育成する」主要施策８－１「グローバル化に対応

---

1) 山形県教育庁高校教育課

2) モジュール学習とは，10 分，15 分などの時間を単位として取り組む学習形態

3) CAN-DO 形式とは，生徒の到達学習目標を「聞く」「話す」「読む」「書く」の技能ごとにリストの形にしたもの

した英語教育の推進」に沿って，英語教育の一層の強化・改善を図るため，平成 27 年度から山形県「英語教育改善プラン」を実施している。この改善プランでは，「自分を表現！郷土を発信！『英語を用いたコミュニケーション能力』」の育成」を本県が目指す英語教育の目標とし，小学校・中学校・高等学校それぞれの児童生徒のめざす姿を具体的に示している。（下線部引用者）

＜目指す児童・生徒像＞

・2020 年まで

（小）身近な話題等について，相手と英語で意欲的に会話することができる。

（中）自分の地域等について，他者にまとまりのある英語で伝えることができる。

（高）他者に対するおもてなしを，英語で行うことができる。

・2030 年まで

（小）自分の興味のあることについて，他者と英語で意欲的に会話することができる。

（中）自分の地域等について，他者に英語で的確に発信することができる。

（高）討論やディベートを，他者と英語で論理的に行うことができる。

この目標を達成するため，今年度から二つの重要施策を立ち上げ，実践している。

その一つが「外国語活動フォローアップ事業」であり，主に小学校での外国語活動の充実を図るため，県内７地区に英語を指導できる日本人の外部人材講師を配置し，教員とのティーム・ティーチングの実践や独自教材の開発を行っている。

二つめの施策が，鶴岡市をモデル地区とした山形県「小中高大連携プログラム」であり，小中高の系統立てた英語教育の在り方，英語学習と郷土学習とのつながり，小中高生の交流を三つの柱に，研究を進めている。このプログラムは，国の「英語教育強化地域拠点事業」を活用し，平成 29 年度まで３年間展開される。

３　先行研究の検討

英語教育の改善に向けて，小中連携，中高連携については，全国各地で様々な実践と，優れた先行研究がある。

青山（2014）は，愛媛県西条市立丹原東中学校と同中学校区の四つの小学校との連携について報告している。「出前授業」や「仮入学」などを通して小中間の円滑な連携を図り，小中連携カリキュラムの作成やクラスルーム・イングリッシュの小中の統一，地域を題材にした共通教材の作成，公開授業後のＫＪ法による研究協議を通じての小中教員の意識のすり合わせなどの実践である。実践は具体的でわかりやすいが，生徒の英語コミュニケーション能力の向上についての成果検証は示されていない。

濱中（2013）は，瀬戸内海にある現代アートの島として有名な直島町における小中連携の実践について具体的に述べている。平成６年度から文部省研究開発学校として長年にわたり丁寧に連携プログラムを展開し，平成 14 年度からは，文部科学省指定研究開発を機に，小学校１年から５年を前期，小学校６年を中学校への移行期として位置づけ，「５・４制」を取り入れている。第３学年からの段階を踏んだ文字指導や，総合的な学習の時間等と連動した英語の「地域発信型単元」の学年毎の設定が特徴的である。例えば，小学校５年生は，直島のアートを外国人に紹介し，中学校２年生は，直島新聞をつくりタスマニアの学校とスカイプで互いの地域の情報を交換している。青山(2014)と異なり，濱中は，児童生徒に見る効果を示している。特に，第６学年の児童の英語学習への肯定感は 100%であり，中学校１年で 81%に一度下がっても，中学校３年では 96%に回復している。全国平均が，小学校６年では76.2%，中学校３年では51.6%であることを考えれば，驚くべき数字と言えよう。加えて，平成 25 年度の小学校３年生から６年生の児童英検の結果でも，すべての項目で全国平均よりも得点が高く，ばらつきもほとんどなくなっている。小中の丁寧な連携が，英語への興味関心や基礎力の定着に大きな効果があることが裏付けられる結果となっている。一つ注目したいのは，それでも中学校１年では一度英語への肯定感が一度下がるという点である。小学校から中学校への橋渡しがいかに難しいかを物語っている。

中高連携の視点では，及川（2007）の分析が興味深い。中高間のギャップを使用テキストの質と量から分析している。質的側面として，本文の難易度，一文あたりの平均単語数，一単語あたりの平均文字数で測り，量的側面として，各課の総単語数を中学校で一般的に使用されている３社のテキストと進学校で比較的多く使用されているテキストを使って調査している。その結果，一単語あたりの平均文字数以外の項目で，中高では大きな差があることが実証されている。これは，中学校と高校との間で見られる生徒の英語読解のギャップを裏付けたものと言える。及川は，中学校においても量を意識した指導がなされるべきだと結んでいる。

一方，海老原・幡山（2012）は，中高連携に関する高校の指導方法に焦点を当てている。中学教師はグループ活動など「主体的な学習スタイルを好む」傾向があるのに比べ，

表１　英語に関する児童生徒の状況
（山形県教育委員会，2013）

対象	内容	山形県	全国
小学校６年生	英語が好きな児童	75.4%	76.2%
中学校３年生	英語が好きな生徒	53.8%	53.0%
中学校３年生	英検３級程度	30.2%	約 32%
高校３年生	英検準２級程度	35.5%	約 31%

高校教師は「教師主導の講義形式の授業」の傾向が多い。この違いを踏まえた中高接続の在り方として，高校における「学びの共同体」の導入や，アウトプットを重視した活動の重要性を主張している。これは，次期学習指導要領や大学入試改革を見据えた４技能重視の流れに合致する。

以上四つの論文に共通するのは，小中連携と中高連携いずれの場合でも，教員同士の相互理解や目標の共有化，カリキュラムの工夫，授業改善が主な視点となっている点である。これらに対して，これから述べる本県の取組は，小中高大を一貫させた連携の見通しと，そこに学習者の視点や異校種間・異学年間の児童生徒の交流が加わっているところに特徴を指摘できる。

４　本県の英語教育の現状と課題

山形県の英語教育の現状について，検証してみたい。

第一に，児童生徒が英語教育をどう受け止めているかについてである。表１からわかるように，小６と中３ともに，山形県の英語が好きな児童生徒の割合は，全国平均とほぼ同じである。また，中３及び高３についてや英検３級あるいは準２級程度の力を持っている生徒の割合は全国平均と比べて，大きな差はない。本県の児童生徒の英語教育の受け止めは，ほぼ全国と同じ水準にあると言える。

第二に，中学高校教員の英語の資格取得状況についてである。表２を見ると，中学・高校ともに，英語教員の資格取得状況は，全国の割合より 10%低くなっている。

また，小学校では英語の教員免許状を保有している教員の割合は 4.7%であり，全国の傾向と同様に，指導に負担や苦手意識をもっている教員が多いのである。

第三に，英語の指導上の課題についてである。

まず，小学校での「外国語活動」は平成 23 年度の学習指導要領改訂から必修となっており，当然のことながら，専科教員のみが指導にあたるわけではなく，教員によって得意，不得意もあり，指導法や外国語指導助手（ＡＬＴ）の活用状況も異なる。また，学校による温度差も大きい。

表２　中学高校英語教員の英語資格取得状況
（山形県教育委員会，2013）

対象	内容	山形県	全国
中学校英語教員	英検準１級程度	18.8%	27.8%
高校英語教員	英検準１級程度	42.1%	52.7%

このような状況を受け，中学校では，ほぼ０からのスタートとなってしまい，中学校になってレベルの上がった学習内容に期待してきた生徒の学習意欲を減退させてしまうこともある。小中の接続がうまくいっているとは言えない。これは，全国の状況と共通しているものである。

そして，中学校ではコミュニケーション活動中心の学習を，比較的ゆっくりとしたスピードで行うが，高等学校に進学すると，急に学習内容が高度化する。及川（2007）でもデータが示されているように読解量が大幅に増え，英語に苦手意識を持つ生徒が増える傾向がある。

加えて，高校では「授業は英語で行うことを基本とする」ことになっている。だが，平成 26 年度英語教育実施状況調査（文部科学省,2015b）の結果からも，指示等，教員の発話は英語で行っているが，生徒の有意味なコミュニケーション活動やアウトプット活動が十分行われているとは言い難い。

本来，授業は，卒業までの３年間を見通して，生徒にどんな力をつけさせたいか，どんなことができるような生徒になっていてほしいか，というゴールの姿を描き，そこからバックワード・デザイン（逆算）して，１年毎，学期毎，単元毎の目標に落とし込み，全体で４技能の調和の取れた能力が育つよう構想する。その上で，「聞く」「話す」「読む」「書く」それぞれの力が，ねらい通りにきちんと付いているのか適切に評価しなければならない。しかしながら，どの単元も同じような力点で教科書をなぞるように進めていく授業が多く見られる。「教科書を教える」授業から「教科書で教える」授業に転換し，「英語を使って何ができるようになったか」を重視する授業の普及が課題である。

ましてや，小中高を通して，生徒のどんな英語の能力を育てたいか，という大きな視点での英語教育の目標の共有化がなされていないのが現状である。

このような課題を解決し，次期学習指導要領で実施される，小学校英語教科化に備える上でも，鶴岡市をモデル地区と指定し，国の「英語教育強化地域拠点事業」の下，平成 27 年度から平成 29 年度までの３年間，山形県「小中高大連携プログラム（世界に羽ばたけ出羽さんさんプロジェクト）」を進めていくこととなった。

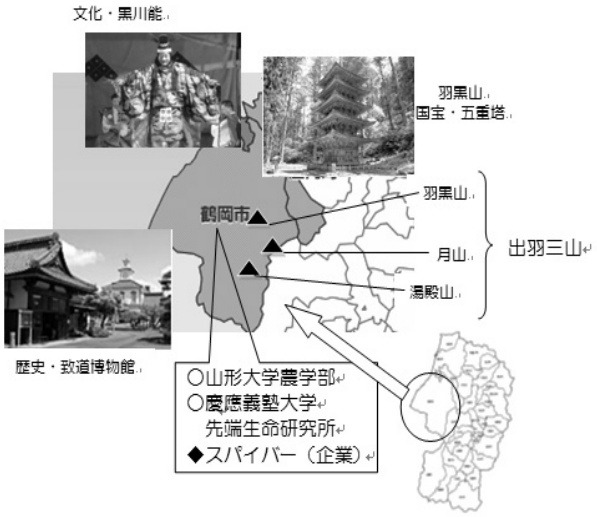

図１　山形県鶴岡市の特色

５　山形県「小中高大連携プログラム（「世界に羽ばたけ出羽さんさんプロジェクト）」の概要

本事業の概要について，以下に述べる。

本事業の拠点となる鶴岡市（図１）は，周囲を山岳信仰で名高い出羽三山に囲まれ，古くから城下町として栄え，旧庄内藩校致道館の学び（『庄内論語』等）の伝承や国の重要無形民俗文化財として指定されている庶民伝承の黒川能など，伝統的な文化が根付いている。昨年 12 月には，独特の食文化が世界的に認められ「ユネスコ創造都市ネットワーク食文化部門」に加盟するなど，国際社会での知名度も上がりつつある。また，市内には山形大学農学部，時代の先端を走る慶応義塾大学先端生命科学研究所，そして人ロクモ糸繊維を開発した地元発のベンチャー企業スパイバー株式会社があり，「知の最先端」を行く地域でもある。当然のこととして，外国語（特に英語）教育に対する関心は非常に高い。

このような地域の状況を踏まえ，鶴岡市では長年に渡り，中学校のブロック単位で小・中学校全教員を参加対象とした「ブロック研修会」を行っており，小・中学校間の連携を目指した教育活動が進められてきた。小学校での外国語活動も盛んで，ＡＬＴ（現在は７名）との協働のもと，どの小学校でも全学年で外国語活動が行われている。今回指定の四つの小学校の児童は，ほぼ全員が鶴岡第二中学校に進学する。さらに，鶴岡市立第二中学校は，平成 24 年に鶴岡中央高校の研究協力校として指定され，主に教員の授業交流等に取り組み，中学校と高等学校の連携実績がある。その県立鶴岡中央高等学校は，平成 21 年度の国の研究指定から始まり，「スピーク・アウト」推進事業を６年間行い，生徒の英語による発信力の育成に力を入れてきた。

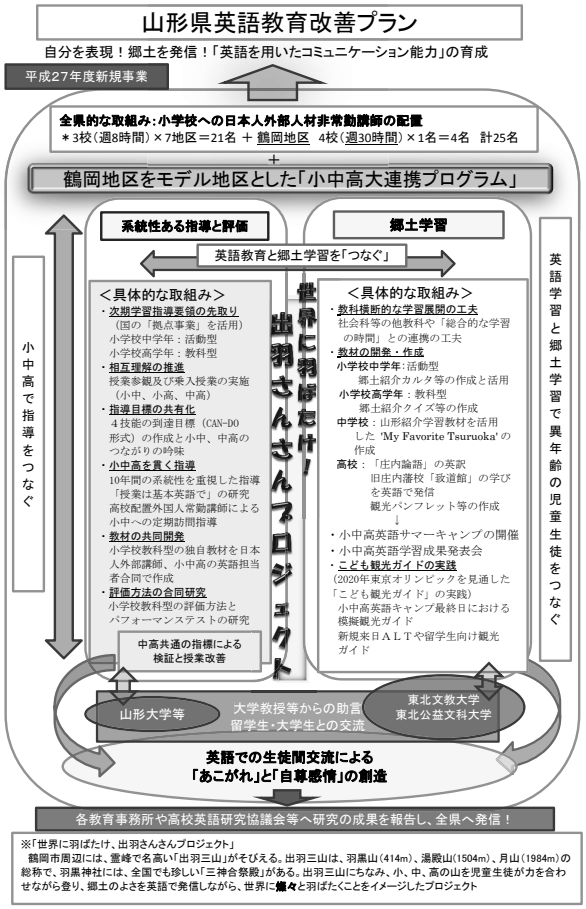

図２　山形県「小中高大連携プログラム」
（山形県教育委員会，2015b）

もう１校の県立鶴岡南高等学校は，国のスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）指定校であり，総合的な学習の時間を活用した「鶴南ゼミ」を核に，山形大学や慶応義塾大学先端生命科学研究所との連携を密にしながら，理数科のみならず学校全体で「探究型」の学習を推進しており，２年生は台湾研修旅行で英語のプレゼンテーションを行い，交流を進めている。

一方で，英語を用いた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて，また，2020 年からの小学校高学年での英語教育の教科化に向けて，高等学校卒業時までの 10 年間を見通した体系的な「英語教育プログラム」の整備が課題となっている。

このプロジェクトは，図２にも記載されているとおり，大きく三つの柱から構成されている。

（１）小学校中学年から高等学校までの 10 年間の系統立てた指導と評価
（２）英語教育と郷土学習をつなぐ
（３）児童生徒間交流によるあこがれの創造

それぞれの項目について詳しく説明する。

（1）小学校中学年から高等学校までの 10 年間の系統立てた指導と評価

①次期学習指導要領の先取り

研究推進校に指定されている鶴岡市立朝暘第三小学校，朝暘第五小学校，京田小学校，栄小学校の四つの小学校では，次期学習指導要領を先取りし，小学校中学年において“Hi, friends ! 1”を用いて活動型の授業を１コマ分モジュール学習で実施し，高学年においては，“Hi, friends !”の補助教材も使いながら教科型の授業を行っている。また，独自教材の開発を進め，特に音と文字の基本的なルールについて，児童が体験的に学べるようなテキストを作成する。

また，クラスルーム・イングリッシュについても，基本的な表現は４校で統一したものを使用するようにする。

こうすることにより，小学校間の格差を極力小さくし，中学校に進学した際には，共通のベースからスタートすることが可能になる。

②相互理解の推進

四つの小学校同士の教員が互いの授業を見合ったり，小学校の授業を中学校の教員が，高校の教員が小学校の授業を参観する等して，お互いが目標や学習内容について理解を深める。小小，小中，小高，中高の連携を大切にし，年に一度は校種の違う授業を見る。ある程度理解が進んだところで，次は，小学校の授業を中高の教員がティーム・ティーチングにより乗入授業を行う。

③指導目標の共有化

小学校卒業時の目指す姿，中学校，高校の４技能に係る到達目標を CAN-DO 形式で作成することにより，育てたい生徒像のイメージを共有する。

以下は，CAN-DO リストを作成するにあたって研究推進委員から出された，目指す姿の一部である。

（小学校）

・簡単な英語をつかってあいさつをしたり，間違いを恐れず，自分の好きなもの，好きなことについて進んで英語で表現しようとすることができる。

・英語で友達や先生，外国の人とかかわるのは楽しい，と感じることができる。

（中学校）

・自分のことや身近な話題について，英語で積極的に表現することができる。

・様々なことに興味関心をもち，それらについて考えようとすることができる。

（高等学校）

・英語を通じて，身近な話題から社会性の高い話題まで理解することができ，それについて自分の考えや意見を適切に伝えることができる。

・郷土のよさを英語で発信することができる。

小学校３年生から高等学校３年までの 10 年間を見通して，どんな生徒を育てるのか，お互いに目指すべき姿を共有することで，それぞれの発達段階に応じて，英語の力をどのレベルまでつけさせたいのかが明確になり，先を見通し，ゴールをイメージしながら指導することができる。

④評価方法の合同研究

③で共有しためざすべき姿を達成するために，各校種で，どのような評価方法が妥当なのかを，共通のテーマとして研究していく。特に，小学校高学年での教科型では，評価の観点や視点をどのようにしていくのか，開発していく必要がある。また，中学校や高等学校では，パフォーマンステストの実施方法等について意見交換する。

さらには，総合的な評価として，ベネッセコーポレーション（2015）の GTEC for STUDENTS[4]を評価指標の一つとして用い，中学校では１学年から３学年まで全員が年に１度受験し，高等学校では，今年度は１年生が受験し，聞く，話す，読む分野のスコアが，どのように伸びていくのか検証していく。GTEC はスコアで示されるので，生徒にとっては自分の英語力の伸びを実感できるとともに，苦手な分野がわかり，その後の学習の指針となる。教員にとっては，技能ごとの伸びを確認することで，授業改善につなげることができる。

（2）英語教育と郷土学習をつなぐ

英語は，あくまでもコミュニケーションのツールに過ぎないので，何を伝えたいか，どんなメッセージをもっているかが重要である。６教振の中でも「郷土学習の推進」に力を入れることが掲げられており，他教科で学んだ郷土のよさをベースにして英語で発信することができれば，より深く郷土に対する理解を深めることができるとともに，郷土への愛着・誇り，自尊感情を培うことにもつながる。

小学校では，身近なことを英語で表現したり，絵やかるた，地図などを使ったり，簡単なクイズで郷土を紹介する。

中学校では，教科書の「郷土」を扱う単元を発展させ，自分の住む地域や好きな名所旧跡等を英語で紹介する文を作り，集大成として“My Favorite Tsuruoka”を作成する。

高等学校では，鶴岡市内の小学生が素読して慣れ親しんでいる『庄内論語』を英訳したり，地域の課題に対する解決策を英語で提案したり，地元の産業や食文化を，地域に

---

[4] Global Test of English Communication の略で，「読む」「聞く」「書く」の３技能を測る中高生対象のスコア型英語テスト。「話す」を加えて受験することで４技能を測れる。

図３　外国人講師へのインタビュー

図４　観光ガイド

住む外国語指導助手や留学生などに英語で発信する機会を設ける。

ひいては，2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックで，地元に来た外国人観光客向けに，「こども観光ガイド」ができるように進めていく。

（３）児童生徒間交流によるあこがれの創造

このプログラムの三つ目の柱が，異校種，異学年間交流である。小中高生が一緒に英語を学び，英語での活動をともに体験をすることで，小学生や中学生は，「あと何年かしたら，あの高校生のように英語を話せるようになりたい」という憧れを抱き，また高校生は，小学生や中学生に英語を教えることを通して自信をつけ，自分の学びも深まるような経験をさせる。その一つが，イングリッシュ・キャンプである。

今年度は，８月 11 日（火），12 日（水）に金峰少年自然の家で１泊２日，13 日（木）の午前中に鶴岡公園周辺の名所旧跡を英語で案内するという日程で実施された。小学生が 18 名，中学生８名，高校生 15 名，計 41 名がキャンプに参加した。

最初は不安そうにしていた児童生徒たちも，外国語指導助手（以下ＡＬＴ）を中心とした外国人講師が準備した活動をとおし，徐々に打ち解けて行った。最終日に英語で観光案内をする班での活動が基本で，各グループとも，小学生が２名～３名，中学生が１名，高校生が２名で編成された。

初日に行われた，外国人講師７名にインタビュー（図３）をしてシートを完成させる活動では，高校生が中心となって何をすべきか小中学生に指示したり，作戦として高校生と小学生がペアになって外国人講師に質問に行くグループもあったりと，最初から高校生のリーダーシップが光っていた。

二日目は，最終日に観光案内する名所旧跡について，外国人講師のサポートの下，グループ毎に案内のプレゼンテーションの準備を行った。小学生は，“This building is very old.　You can see many flowers in the garden.” のような簡単な表現を用いながら説明する練習をするとともに，各名所旧跡のマスコットキャラクターを画用紙に描き，中学生は，英語による基本的な説明の準備，高校生は，さらに詳細な情報を付け加えるとともに，外国人講師からの質問に答える準備を進めた。キャンプの最終日には，外国人講師を観光客に見立てて，グループ毎に英語によるガイドを行った（図４）。

キャンプについての生徒の感想を一部紹介する。

（小学生）

・今まで，中高生や他の小学校の人と話したことはあまりなかったけど，高校生からたくさんのことを教えてもらったり，友だちになれたりしてよかった。英語もがんばりたい。
・他の学校，年上の人でも英語でたくさんの活動を一緒にできたので，よかった。今まであまり使わなかった英語を楽しいと思えた。
・前は，英語で話すのが少しはずかしくて小さな声になってしまったけど，大きな声で話せるようになった。
・私が，ＡＬＴの先生の言っていることが分からなかった時，高校生の人が教えてくれて，すごくうれしかった。
・最初は，わからない人もいて，とても緊張したけれど，みなさんやさしくて，将来こんな中高生になりたいと思いました。いつもは日本語でしゃべっているけど，英語で話して伝えるのもいいなと思いました。
・二日目の野外炊飯でみんなと協力しながら作ることができた。たくさんのＡＬＴの先生に英語をたくさん話すことができてうれしかった。もっと英語を勉強してすらすら話せるようにしたい。たくさんの友達と話す

ことができて楽しい三日間になった。最終日の観光はとても楽しかった！！

（中学生）

・はじめは，知らない人ばかりで，うまくやっていけるか心配だったが，ＡＬＴの先生や，担当のスタッフの先生方のお陰もあり，振り返ってみるとあっという間の３日間だった。会話の中で戸惑うこともあったが，自分なりに表現して伝わったときの喜びは，大きいものだった。とても楽しいキャンプだった。

・私はこのキャンプで，英語を使う楽しさや鶴岡の魅力，そして人と協力することのすばらしさを学ぶことができた。最初は緊張したし，あまり積極的ではなかったが，やっていくうちに慣れてきて，本当に楽しかった。このキャンプで得たことを活かして，これからもがんばっていきたい。

（高校生）

・「使える英語」を学びたい！と思って志望したこのキャンプ。一番に感じたことは，受け身では英語は身につかない，ということだった。自分から話しかけようという思いが強くなった。また，チームで協力して活動することも多く，英語力だけでなく高校生としてまとめる力もついた。目標であった「使える英語」も，ＡＬＴの先生たちとの会話を通して身につけることができた。

・小中学生に教えたり，ＡＬＴの先生と話をしたりする中で，英語を実際に使うことの大切さを改めて感じた。このキャンプで学んだことを，これからの生活や進路に活かせるようにしたい。

・今回のイングリッシュ・キャンプで，たくさんの外国人と話すことで，自分の世界が広くなっていくのを実感できて，とても楽しかった。また来年も是非参加したい。

キャンプでの様子や，生徒の感想からは次の点を指摘できる。第一に，他校の生徒や年齢や校種の違う人，ＡＬＴ，様々な人との交流を楽しんでいることである。たとえば，小学生は，「高校生からたくさんのことを教えてもらったり，友だちになれたりしてよかった」「他の学校，年上の人でも英語でたくさんの活動を一緒にできたので，よかった。今まであまり使わなかった英語を楽しいと思えた」と言う。

第二に，英語を実際に使って活動することを楽しんでいることである。たとえば，小学生は「二日目の野外炊飯でみんなと協力しながら作ることができた。たくさんのＡＬＴの先生に英語をたくさん話すことができてうれしかった。もっと英語を勉強してすらすら話せるようにしたい。」高校生は「今回のイングリッシュ・キャンプで，たくさんの外国人と話すことで，自分の世界が広くなっていくのを実感できて，とても楽しかった。」と感想を述べている。

第三に，高校生が自然とリーダーシップを発揮して，小中学生の面倒をしっかり見ていることである。たとえば，小学生は「ＡＬＴの先生の言っていることがわからなかった時，高校生の人が教えてくれて，すごくうれしかった」と言い，高校生は「チームで協力して活動することも多く，英語力だけでなく高校生としてまとめる力もついた」と記している。

第四に，高校生が小中学生の目標になっている，ということである。たとえば，小学生は「最初は，わからない人もいて，とても緊張したけれど，みなさんやさしくて，将来こんな中高生になりたいと思いました」と書いている。実は，キャンプ後に，ある小学校の教員から聞いたことだが，「先生，私も中学生や高校生になったら，あんなふうに英語をスラスラ話せるようになれますか？」と目を輝かせて尋ねてきた児童がいたとのことだった。上級生の姿に「あこがれ」を抱き，これから英語学習をする上での具体的な目標になったことが伺える。

小中高生が同じグループで活動するというのは，数学や理科など，英語以外の教科を考えた場合，簡単にはいかないだろうと予想される。実際，キャンプを始める前は，音声中心に学んでいる小学生にツアー・ガイドなどできるのだろうかと不安であった。しかしながら，実際にやってみると，そんな不安は払しょくされ，上級生は，実に上手に下級生をリードしていた。コミュニケーションの手段である「ことば」である英語だからこその可能性を再認識した。

このイングリッシュ・キャンプで垣間見えた小中高生の可能性やつながりを大切にしながら，今後は，以下のような取組を展開していく予定である。

・高校生による小学校外国語活動への協力
・英語による絵本の読み聞かせ
・『庄内論語』を英語の寸劇等にして紹介

さらに，12 月か１月には「学校代表合同発表会」を実施し，小中高生が，それぞれの英語学習の成果を発表し合う場を設ける予定である。発表会に参加した生徒がいい刺激を受け，お互いを讃え合うとともに，小中学生が高校生を見て，「将来は，あれくらい英語を話せるようになりたい」と思うような，具体的な目標となるべき姿を提示し，「あこがれ」を抱くような場を設定するのがねらいである。

６　今後の展望

今年度から始まった「小中高大連携プログラム」だが，今後は，以下の視点を中心に研究・実践を進めていく。

第一に，小中高を連携させたカリキュラムや教材の開発である。たとえば，次のものである。小学校で始まる「英語教科化」を踏まえた，音と文字に関する基本的なルールをまとめた独自教材の開発と小中高での活用。10 年間の見通しをもちながら，小中と中高の連携を重視した中学校入学時及び高等学校入学時における橋渡し教材の共同開発。小中高のそれぞれの接続期を意識した乗入授業の実施とその効果に関する検証，である。ここで要になるのは，小学校と高校をつなぐ中学校の取組である。中学校の果たす役割を明確にし，教育行政としても，どんな支援が必要かつ可能なのか研究していかなければならない。

第二に，社会や道徳，総合的な学習の時間で学んだ郷土に関する内容を英語学習といかに連携していくか，という点である。そのためには，英語だけでなく，他の教科の年間学習指導計画が職員間で共有できる形になっていて，何年生のどの時期に，どの単元で郷土に関する内容を扱うかが見えることが必要である。その上で，場合によっては管理職のリーダーシップの下，教科を越えて話し合いをもつ機会や仕組みを整えることで，「合教科」的な発想を取り入れた展開が可能になる。

第三に，上記の郷土学習を発信する機会の設定である。一つは「観光ガイド」等の実施である。今回は，イングリッシュ・キャンプの最終日に模擬ツアー・ガイドを行ったが，来年度以降は，ツアーに新規来日ＡＬＴや留学生を招待し，実践に近い形の場面設定にしていく。また，キャンプ以外の場面でも，外国の方がいれば簡単な説明を英語でできるようにする仕掛けづくりも必要である。

第四に，単なる観光に留まらず，鶴岡市役所の職員の協力も得ながら，「地域課題」をテーマに，探究し，その成果を高校生と大学生が共同でプレゼンテーションしたり，ディベートを実施したりすることで，高校生の英語力の高度化と高大連携の強化を模索する。

第五に，今年始まったばかりの本プログラムの３年間の取組の成果と課題を，GTEC 等のテストにより，データに基づく経年変化を客観的に検証し，今後の改善に活用する。

さらには，鶴岡で展開するこのプログラムの成果と課題を年度毎にまとめ，県内の他の地区にも発信していくことが重要である。このプログラムの成果物を他地区でも共有することで，０からの出発ではなく，共通ベースから積み上げ，バージョンアップすることで，全県的な英語力の底上げにつなげていかなければならないと考えている。加えて，県内の大学との連携を強め，大学生や留学生との交流を皮切りに，生徒が郷土のよさを英語で伝える機会を増やしていくことも重要である。

おわりに

６教振のキーワードは「つなぐ」である。点が線に，線が面に，面が立体となってダイナミックに「いのち」「学び」「地域」がつながっていったときに，21 世紀をたくましく生きぬく生徒を育成することができると考える。

英語教育は，単に英語の力を身につけさせることが目標ではなく，英語をとおして他者とかかわるコミュニケーション能力に磨きをかけ，異なるものを受容し，何らかのアクションを伴うような変容を起こさせることにあると考える。点が線になるには，同じ年代の児童生徒が関わる横糸を，線が面になるためには，違う年齢の児童生徒が関わる縦糸を，そして立体にするには，異なる文化をもつ人との関わりをもつような「場」を意図的に提供していくことが肝要である。そして，伝えるメッセージの核に「郷土」を据えること，普段は何気なく暮らしている地元の魅力を知り，また発掘し，それを英語で世界に発信すれば，地域の活性化にもつながる可能性を秘めている。何より自分の故郷に誇りを抱くことは，自己肯定感を育むことになる。

本プログラムを力強く実践していくことが，これからの本県の英語教育の指針を示すカギになるといえよう。

文献

青山敬明　2014　小中連携・英語コミュニケーション能力育成事業から学んだこと，鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要，５，51-59.

ベネッセコーポレーション　2015　GTEC＜http://www.benesse-gtec.com/fs/＞（最終閲覧日 2015 年９月 27 日）

海老原万里子・幡山秀明　2012　英語教育と文学的教材［16］　－中高接続を踏まえた高校英語改善と工夫－，宇都宮大学教育学部　教育実践総合センター紀要，35，327-334.

濱中紀子　2013　小学校第３学年からの教科「外国語」の実践研究における成果と課題，鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要，４，51-60.

文部科学省　2013　グローバル化に対応した英語教育改革実施計画　＜http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf＞（最終閲覧日 2015 年９月 27 日）

文部科学省　2014　今後の英語教育の改善・充実方策について～グローバル化に対応した英語教育改革の５つの提言～（報告）＜http://www.mext.go.jp/b_menu/

shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm＞（最終閲覧日 2015 年 9 月 27 日）
文部科学省　2015a　生徒の英語力向上推進プラン http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/08/04/1360076_8.pdf（最終閲覧日 2015 年 9 月 27 日）
文部科学省　2015b　平成 26 年度「英語教育実施状況調査」の結果について＜http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1358566.htm＞（最終閲覧日 2015 年 9 月 27 日）
及川賢　2007　検定教科書（外国語（英語））を通して見た中高間のギャップ，埼玉大学紀要　教育学部，56(2)，73-80.
山形県教育委員会　2013　平成 25 年度「英語教育実施状況調査」（文部科学省）本県の結果
山形県教育委員会　2015a　第 6 次山形県教育振興計画＜http://www.pref.yamagata.jp/ou/kyoiku/700001/rokkyoushin/6kyoushin-sakuteiban/6kyousshin-keikaku＞
（最終閲覧日 2015 年 9 月 27 日）
山形県教育委員会　2015b　英語教育強化地域拠点事業実施計画書